曹植の評價をめぐつて

——魏晉時代を中心として——

植木久行

序

この小稿の意圖は、曹植への評價の歴史的變遷とその種々相をさぐることにある。今回、魏晉時代をとりあつかうが、引き續いて、南朝期の評價に進みたいと思つている。

一

魏志曹植傳では、曹植の早熟な文才を「年十歳餘、誦讀詩論及辭賦數十萬言、善屬文」と記した後、次の有名な話が語られる。

太祖嘗視其文、謂植曰、汝倩人乎、植跪曰、言出爲論、下筆成章、顧當面試、奈何倩人、

文中の「言出爲論、下筆成章」の二句は、『北堂書鈔』（卷98敏捷）等の類書に引かれ、曹植の俊敏な文才を形容することばとなつている。またこの話に基づいて、簡文帝蕭綱の幼少時の逸話が生れている（『梁書』卷4）。

太宗幼而敏睿、識悟過人、六歳便屬文、高祖驚其早就、弗之信也、乃於御前面試、辭彩甚美、高祖歎曰、此子、吾家之東阿、

東阿とは、東阿王曹植のことである。高祖（蕭衍）がその第三子太宗（蕭綱）を「吾家之東阿」と呼んだのは、魏志曹植傳に基づくとはいえ、皇族・王族の子の早熟な文才、といつた意識の共通性がみられる。つまり、曹植の文才には、たえず皇族的な心象がつきまとうのである。南齊の武帝の第八子

蕭子隆が、「吾家東阿也」と呼ばれたのも同様であろう（『南齊書』巻40）。

子隆娶尚書令王儉女爲妃、上以子隆能屬文、謂儉曰、吾家東阿也、儉曰、東阿重出、實爲皇室蕃屏、

魏志本傳には、續いて次のごとく記される。

時鄴銅爵臺新成、太祖悉將諸子登臺、使各爲賦、植援筆立成、可觀、太祖異之、

魏志武帝紀、建安十五年の條には、「冬、作銅爵臺」とあるが、曹植の「登臺賦」は、その年に作られたわけではない。曹丕の「登臺賦序」に「建安十七年、春遊西園、登銅爵臺、命余兄弟並作」とあるのによれば、建安十七年、曹植二十一歳の時の作である。

曹植の「登臺賦」は、太祖曹操の賞讃をえた。裴注に引く陰澹撰『魏紀』にも「太祖深異之」とあり、現存資料で年代を確定できる最初の文才の評價として、はなはだ重要であろう。曹丕の「登臺賦」は「登高臺以騁望、好靈雀之麗嫺、飛閣崑其特起、層樓儼以承天、步逍遙以容與、聊遊目於西山」云々と續くが、曹植の「登臺賦」には、次のような一節がある。

揚仁化於宇內、　盡肅恭於上京、
唯桓文之爲盛、　豈足方乎聖明、
休矣美矣、惠澤遠揚、
翼佐皇家、寧彼四方、
同天地之矩量、　齊日月之輝光、

兩者の作品を較べると、曹丕の賦が銅爵臺からの眺望や偉觀に終始するのに對して、曹植の賦は父の德望や仁政の讃美にも充分力が盡くされている。曹操が植の才能を非凡に思つた背景としては、かかる植の才氣や機轉に基づくところが大きかつたに違いない。

このことは、魏志巻20に引く郭頒撰『（魏晉）世語』の話と關連させてみると、甚だ興味深い。

魏王嘗出征、世子及臨菑侯植並送路側、植稱述功德、發言有章、左右屬目、王亦悅焉、世子悵然自失、吳質耳曰、王當行、流涕可也、及辭、世子泣而拜、王及左右咸歔欷、於是皆以植辭多華、而誠心不及也、

特に終りの傍點の部分は、建安期における曹植の志向した表現世界にみられがちな空疎な文采を指摘した評語として重要であろう。

銅爵臺のことに關して、酈道元撰『水經注』巻10濁漳水の

條には、

（鄴）城之西北有三臺、皆因城爲之基、巍然崇擧、其高若山、建安十五年、魏武所起……　中曰銅爵臺、高十丈、有屋百一間、臺成、命諸子登之、並使爲賦、陳思王下筆成章、美捷當時、

とある。「美捷當時」の語によれば、二十一歳の曹植は、いわゆる建安文壇の頂點に立ちうる才能を示したことになる。ちなみに、この濁漳水の條に引く曹操の「登臺賦」[1]も、あるいはこの時の作であるかも知れない。

建安期の曹植に對する評語に觸れたい。陳琳の「答東阿王牋」には、曹植の「神龜賦」に對して、「音義既遠、清辭妙句、燦絶煥炳」云々と評する。丁晏は『曹集銓評』卷3神龜賦の題下注に、「王三十八歳徙封東阿、此賦在東阿時作」と述べるが、誤りである。陳琳は建安二十二年の疫病によって沒しているので、「神龜賦」「答東阿王牋」は、ともに少くとも曹植二十六歳以前の作でなければならない。

また吳質の「答東阿王書」にも、曹植の作品の批評に觸れる部分がある。この書は、「與吳質書」（『文選』卷42所收）の返書である。

質白、信到、奉所惠貺、發函伸紙、是何文采之巨麗、而慰喻之綢繆乎……　還治、諷采所著、觀省英瑋、實賦頌之宗、作者之師也、

この書の作成された時期については、建安二十一・二年頃で、しかも二十二年十月以前であるという說[2]がある。陳琳の書とほぼ同時期の作品と考えてよいであろう。吳質の「賦頌之宗、作者之師」という評語は、司馬相如に對する班固の評「蔚爲辭宗、賦頌之首」を踏まえている[3]。吳質の曹植に對する評價は、少くともその評語による限り、はなはだ高いと見なさざるをえないわけである。

ただ、陳琳の場合も吳質の場合も、その評語には、曹植が魏王曹操の子である、という身分上のありようが大きくかかわっているであろう。曹植の陳琳に對する辛辣な論評は、かえって陳琳の曹植に對する評語にひそむ背景を考えさせるに充分である。曹植の「與楊德祖書」には、次のごとく記されている。

以孔璋之才、不閑於辭賦、而多自謂能與司馬長卿同風、壁畫虎不成、反爲狗也、前書嘲之、反作論盛道、僕讚其文、夫鍾期不失聽、於今稱之、吾亦不能妄嘆者、畏後世之嗤余也、

この曹植の論評は、『文心雕龍』知音篇に、「才實鴻懿、而崇

己抑人者、班曹是也」と批判されるものである。また序志篇にも「陳書辯而無當」と酷評されている。書の制作年代は、文中の「僕少好詞賦、迄至于今、二十有五年矣」の語によって、盧弼は「此書、蓋建安二十一年之作」[4]と述べるが、建安二十一年頃から楊脩の沒年である建安二十四年秋（裴注所引『典略』）までの間に書かれた作品と考えるべきであろう。曹植自ら「畏後世之嗤余也」[5]と辯解するが、結局のところ、はなはだ無遠慮な論評であるといわざるをえない。それゆえ、逆に陳琳の曹植に對する「音義既遠、清辭妙句、燮絶煥炳」（燮絶煥炳、言文辭光明也―呂向注）の評語も、充分注意して受けとるべきであろう。

吳質の場合も同樣である。魏志卷21に引く魚豢撰『典略』には、吳質の爲人を記して、「質亦善處其兄弟之間、若前世樓君卿之遊五侯矣」という。樓君卿とは、前漢の樓護のことで、いわば巧みな社交家とでもいえる人物である（『漢書』卷94遊俠傳）。そうした社交肌の吳質の評語である以上、やはり何ほどかは割引いて捉えざるをえないであろう。

また邯鄲淳が曹植を「天人」と呼んだ例[6]もあるが、より重要な文學的評語は、黃初四年の文帝（曹丕）のそれである。曹植の「上責躬應詔詩表」に對する文帝の詔の逸文[7]として、「所獻詩二篇、徽一作微顯成章」の語が傳わる。「所獻詩二篇」とは、「責躬詩」と「應詔詩」をさしている。

これらの評語を概觀すると、批評の重點が表現の美に置かれていることに氣づく。かつて揚雄は「詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫」（『法言』吾子篇）と述べ、いちおう制約つきではありながら賦の表現の美を評價した。その後、揚雄の文學觀を支えていた、いわば漢代の精神的原理とでもいえる儒教が、後漢末の混亂によって、その思想的支配力をうしなう事態が起つた。その結果、諷諭性・說理性の內在によつてのみ、文學として存立しえた時代は過ぎ去り、逆にそうした政治的・倫理的な側面におおわれがちであつた言語の構築する美が、しだいに獨自の價値を認識されつつ論評されていくように思われる。

かかる文學思想の變遷を背景として、「詩賦欲麗」（『典論』論文篇）と述べた文帝の發言は、詩と賦を一まとめにくくることによつて、それまでは充分發達していなかつた詩のむかう方向を表現の華麗さに置いたものとして注目される。つまり、詩賦評價の主要な尺度となり始めた表現の美によつて曹植の作品を論評するところに、漢魏間の時代思潮が色濃く反映しているように思われる。

魏志卷20中山恭王袞傳には、「凡所著文章二萬餘言、才不及陳思王而好與之侔」の句がある。曹袞は曹植の異母弟である。同傳に、「少好學、年十歳餘能屬文」と記される弟が、「好與之侔—hào yǔ zhī móu」ということであれば、曹氏一族における曹植の文人的位置を推しはかるに充分であろう。その意味で、曹植の死後十年もたたないうちに、明帝が植の詩文集編纂を命じている點は充分注意されるべきである。魏志曹植傳には、景初年間（二三七～九）の詔を引いて

陳思王昔雖有過失、既克己愼行、以補前闕、且自少至終、篇籍不離於手、誠難能也、……撰錄植前後所著賦頌詩銘雜論凡百餘篇、副藏內外、

という。この明帝（曹植の甥）の詔は、曹植への文學的評價の高さを端的に示すものである。曹植が自撰作品集を持っていたことは、その「文章序」によってわかるが、父の曹操にも自撰作品集があったように推測される。(8) おそらく當時の文人意識の向上と關連するであろうが、明帝の曹植集編纂の詔は、植の過去の罪を一切許した上での處置であり、それゆえ、曹植に對する明帝の評價の高さを充分讀みとることができる。

明帝と曹植との直接の對面は、太和五年の冬から太和六年の春にかけての期間のみであった。このことは、魏志明帝紀、太和五年八月の詔に、

朕惟不見諸王十有二載、悠悠之懷、能不興思、其令諸王及宗室公侯各將適子一人朝、

とあることによってわかる。文中の「十二載」とは、文帝の黃初元年より明帝の太和五年までの歳月をさしていうからである。

太和六年、明帝の娘の曹淑が夭折した。(9) 娘の死に對する明帝の悲しみは、『宋書』卷17禮志七に、

魏明帝有愛女曰淑、涉三月而夭、帝痛之甚、追封謚平原懿公主、葬於南陵、立廟京師、無前典、非禮也、

と記されるところである。いわゆる三祖の一人に數えられる明帝は、自ら娘に對する誄を書き綴っている。『太平御覽』卷596に引く『魏志』の逸文には、

明帝詔曹植曰、吾既薄才、至於賦誄、特不閑、從兒陵上還、哀懷未散、作兒誄、爲田公家語耳、荅曰、奉詔、並見聖思所作故平原公主誄、文義相扶、章章殊興、句句感切、言動神明、痛貫天地、楚王彪等聞臣爲讀、莫不揮涕、

とある。この話は、曹植の洛陽滯在中のことであろう。この時、曹植は太和六年正月の元會に參列するために、弟の曹彪

らとともに適子（植の場合は曹志）をつれて上京していたのである。

明帝の詔は、結局のところ、暗黙のうちにわが娘の誄文を作ってくれ、という依頼がこめられているように解される。そのことを裏づけるごとく、曹植には「平原懿公主誄」の作品が傳わる。子どもをなくした體驗[10]をもち、しかもなき父の同母弟であるということのほかに、曹植が誄文の作家としてすぐれていたためでもあろう。曹植には、「武帝誄」「文帝誄」「任城王誄」「卞太后誄」等の作があり、劉勰は「陳思叨名、而體實繁緩」（『文心雕龍』誄碑篇）と評するが、適切な批評ではないように思われる。それは、曹植の哀誄には、主として自らと血のつながりのある者に對して作られた、という獨自の立場があるからである。明帝の眞意は、深い哀傷の念を慰める一助にと、曹植の誄文を期待した點にあるのではなかろうか。

明帝のかかる文才のみの評價は、曹植自身うとましく思ったに違いない。曹植は自らの志を經世濟民に置いていたからである。しかし曹魏朝の中樞部は、曹植を始めとする宗族の政治への進出を極度に警戒した。魏志本傳に、「植每欲求別見獨談、論及時政、幸冀試用、終不能得、既還、悵然絶望」と記されるのも、自然の趨勢であるといわざるをえない。

ちなみに、南宋の曾慥撰『類說』（紹興六年四月の自序あり）に觸れたい。その卷4に收める『玉箱雜記』の繡虎の條には、

曹植七步成章、號繡虎、

の語がみえる。『玉箱雜記』という書は、南宋初めに存した舊籍の、いわば遺文僻典の類いと思われるが[11]、その言葉は、『世說新語』文學篇の有名な「七步詩」の逸話から派生したものであろうか。

曹植を〝繡虎 xiù hǔ〟と稱する話は、『類說』よりも、江戸時代に流行した明の王世貞撰『世說新語補』[12]を通して知られる。その賞譽篇には、「曹子建七步成章、世目爲繡虎」とある。但し「繡虎」の語の出所は、劉義慶撰『世說新語』ではなく、明の何良俊撰『何氏語林』卷16賞譽篇上にのせる、

曹子建七步成章、世目爲繡虎、目王仲宣爲泥下潛蛙、

の語である。資料的には問題があるが、曹植の詩才がやがて華麗な心象につつまれることを示唆するのではないか。王粲の「泥下の潛蛙」と比較すると、一目瞭然であろう。「世目爲繡虎」という語には、憧憬をこめた一種の高い讃辭が、ある程度表白されているように思われる。

二

『魏略』や『典略』を著した歴史家魚豢は、曹植より少し後の人である。魏志曹植傳の裴注には、魚豢のことばとして、

　諺言、貧不學儉、卑不學恭、非人性分也、勢使然耳、此實然之勢、信不虛矣、假令太祖防遏植等、在於疇昔、此賢之心、何緣有窺望乎、彰之挾恨、尙無所至、至於植者、乃令楊脩以倚注遇害、丁儀以希意族滅、哀夫、余每覽植之華采、思若有神、以此推之、太祖之動心、亦良有以也、

の語が引かれる。また同傳の西晉初めの陳壽の評は、次のごとくである。

　陳思文才富艶、足以自通後葉、然不能克讓遠防、終致攜隙、

魚豢は當時の儒者の隗禧に從つて學んだ人(13)である。また陳壽は良史の才ありと稱され、その史實に對する筆法は、「辭多勸誡、明乎得失、有益風化」(『晉書』卷82) の語によれば、儒家的な文學態度にあるといえよう。それゆえ兩者が一樣に曹植の身の處し方には批判的であるが、その文學に對しては高い評價をあたえていることは注意してよいであろう。特に陳壽の場合は、曹植の文學が悠遠な時空をのりこえて後世に傳わる文學である、と早くも論斷した發言である。ただそれらの評語は、いずれも過去の事象に對する普遍的な眺望を職掌とする歴史家のそれである以上、曹植の文學が後世の文人にあたえた直接的な影響の事例としては捉えがたいと思われる。

　魚豢の曹植の文學に對する特異なことばとして、『太平御覽』卷376に引く『魏略』の逸文に、

　陳思王精意著作、飲食損減、得反胃病也、

の語がある。この語は、梁の元帝撰『金樓子』立言篇上にも、「揚雄作賦有夢腸之談、曹植爲文有反胃之論」云々とみえるが、この評の特異な點は、曹植を苦吟の作家として捉えた點である。〝反胃〟とは、胃が食物を受けつけずに吐いたという意である。かかる視點は、『世說新語』の「七步詩」の逸話を始めとして、『文心雕龍』神思篇の「子建援牘如口誦」等の俊敏な作家としての心象とあい矛盾するように思われる。しかし、その二つの視點は互いに矛盾するものとしてではなく、曹植の文才のありようをより適切に補完しあうものとして捉えるべきであろう。その意味でも、魚豢の說は重要な指摘であるように思われる。

西晉時における評語としては、陳壽の評以外に、左思の「魏都賦」の評がある。賦中の魏の帝室の盛んなありさまを述べた條には、

本枝別幹、蕃屏皇家、勇若任城、才若東阿、抗旆則威嶮秋霜、摛筆則華縱春葩、

とあり、曹魏朝の文武の代表として、東阿王曹植と任城王曹彰とが捉えられている。かかる視點は、すでに陳壽の評（魏志卷19の卷末）に指摘されている。曹植の文才を評した「摛筆則華縱春葩」の語の出典として、李善は班固作「答賓戲」の「摛藻如春華」の句をあげるが、むしろ曹植の「文章序」の、

君子之作也……　質素如秋蓬、摛藻也如春葩

の語をあげるべきであろう。「文章序」とは、曹植の自撰作品集—前錄七十八篇—の自序であり、曹植の文學意識の一端をあらわす語でもあるからである。さらに、左思の序によれば、「三都賦」は漢賦の虛飾を廢して實證的に書かれた作品であるという。左思が曹植の別集を讀んだことは、充分考えられることである。

曹植の死後の魚豢・陳壽・左思等の評語を概觀してきたが、それらの評語も、既にみた漢魏の間と同樣に、批評の重點がおおむね表現の織りなす美に置かれており、曹植の文學の基底によこたわる思念・情念への視角に缺けているように思われる。しかもそれらの著作や作品は、多かれ少なかれ當時の文化全體を鳥瞰すべき責務を帶びている。それゆえ曹植の死後、その文學が當時の文壇にあたえた例としては必ずしも充全ではない。西晉期、曹植の名や詩文を讀みこんだ作品が僅少であるからである。

○傅玄「七謨序」

自大魏英賢迭作、有陳王七啓、王氏七釋、楊氏七訓、劉氏七華、從父侍中七誨、竝陵前而邈後、揚清風于儒林、亦數篇……

○陸機「鞠歌行序」

又東阿王詩、連騎擊壤、或謂蹙鞠乎、

○陸雲「喜霽賦序」

余既作愁霖賦、雨亦霽、昔魏之文士、又作喜霽賦、又聊廁作者之末、而作是賦焉、

魏晉間の人である傅玄は、曹植に始まる「惟漢行」「美女篇」等の同樂府題の作品をつくったり、漢代の樂府古辭に始まる「怨歌行」（曹植にも同樂府題の詩が殘る）を擬作している。このことも考えれば、かれの建安期への視角は必ずし

も稀薄であったとはいえないであろう。陸機の建安期への視角は、「弔魏武帝文」に明瞭に窺えるが、引用した「鞠歌行序」に見られる曹植の詩は「名都篇」であり、「連騎擊壤」の句は「連翩擊鞠壤」の誤りであろう。

陸雲の用例には曹植の名はみえないが、おそらく曹植も意識しているであろう。かれの建安期への視角は鄴城滯在と關係し、「登臺賦」の作も傳わる。現在、「喜霽賦」は曹丕・曹植・繆襲の作を傳え、「愁霖賦」は曹丕・曹植・應瑒の作を傳える。陸雲の作品はそれらを意識するであろうが、その「與兄平原書」等には、王粲らの文人の名はみえるが、曹植の名はみえない。そうしたところにも、曹植の文學のもたらす影響力の弱さが推測できるように思われる。

この點に關しては、さまざまな原因をあげうるであろう。當時依然として、漢代の賦家、例えば司馬相如・張衡・馬融・班固・蔡邕といった人々の影響が强かったためでもあろう。また建安文學以後、太康文學まで久しい文壇の空白期間が存在したので、曹植の文學の咀嚼にもやはり長い時間を必要としたのかも知れない。江淹のいわゆる「貴遠賤近、人之常情、重耳輕目、俗之恒弊」（「雜體詩序」）の一例ともいえるであろうし、當時の文學樣式の享受の實態とも關連するであろう。

『晉書』卷50曹志傳には、かかる西晉期の曹植像の一端を傳える資料がある。

（武）帝嘗閱六代論、問志曰、是卿先王所作邪、志對曰、先王有手所作目錄、請歸尋按、還奏曰、按錄無此、帝曰、誰作、志曰、以臣所聞、是臣族父冏所作、以先王文高名著、欲令書傳於後、是以假託、帝曰、古來亦多有是、顧公卿曰、父子證明、足以爲審、

曹冏の「六代論」[14]が曹植に假託されていた點が興味深い。曹植の子の曹志の言葉によれば、この假託は父の文名にあやかつたことになるが、むしろ大切な點は、曹冏のこの作が曹植の作品の一つと考えても、思想的に少しも矛盾しないことである。

「六代論」には、次のごとき一節がある。

子弟王空虛之地、君有不使之民、宗室竄於閭閻、不聞邦國之政、權均匹夫、勢齊凡庶、內無深根不拔之固、外無盤石宗盟之助、非所以安社稷、爲萬世之業也……　今之用賢、或超爲名都之主、或爲偏師之帥、而宗室有文者必隰小縣之宰、有武者必置百人之上……

この論は、少帝（齊王芳）が幼少であったとき、曹冏が曹爽

を感悟させようとして作つた[15]とされるが、引用した箇所からも推察されるごとく、曹氏一族の抑壓された窮狀を訴えた作品である。その點では、曹植が異姓の擡頭を豫測して骨肉への疎外の實態を說き、再び骨肉の親を政治の要路にすえなおすことによつて國家の存續を計ろうとした思考と同じ論旨である。[16]

清の丁晏には、次のような說[17]がある。

且司馬氏之禍、陳王固先知之矣、審擧一疏、極論當權者謀能移主、威能懾下、取齊者田族、非呂宗也、分晉者趙魏、非姬姓也、藉田說以齊諸田・晉六卿・魯三桓、爲諸侯之蝎、令陳王得掌朝政、必能戢司馬之權而奪其柄、王之見疏、魏之所以速亡、

この說の當否は、しばらく置くとして、かかる說の生れるほど、曹植の考えは西晉王朝をつくつた司馬氏にとつて誠に不都合な論旨であつた。傳曹植作「六代論」を讀んで、曹志を信任する司馬炎は、どのような氣持をいだいたであろうか。結局、曹植の自作ではないとされたが、曹植の文學には、多かれ少なかれ政治的要素が含まれる傾向がある。その文章にひそむ政治への執拗な參與の姿勢こそ、六朝期において、かれの作品の重要な部分が詩文の享受者層の視野から遠ざかる原因の一つであつたと思われる。曹植は文帝・明帝の二代にわたつて、王室と骨肉の間柄にあるという血統上の近親性によつて、さらには自らの罪をつぐなう決意のもとに政治への參與を希望した。そうした政治への熱意の挫折が、曹植の文學をつらぬく慷慨の基調をなしたと思われる。[18]

『梁書』卷37何敬容傳には、

自晉宋以來、宰相皆文義自逸、敬容獨勤庶務、爲世所嗤鄙、

とあり、同傳の姚察の論には、

魏正始及晉之中朝、時俗尚於玄虛、貴爲放誕、尚書丞郎以上、簿領文案、不復經懷、皆成於令史、逮乎江左、此道彌扇、

とある。南朝の貴族社會では、政治の實務上の勤勉さはかえつて不評をまねく一因となり、緣情的な文章や玄虛的な風流の世界への逸樂こそ、次々と交代する政權の中で、最も明哲保身に適した處世法の一つであつたに違いない。このことは、政治の不安定による政治への不信や輕視とも關連しているであろうが、そうした貴族の政治へのかかわりかたが、當時の詩文への好尚に大きな影響を及ぼすことは自然の道筋であろう。

曹植の文章のなかの政治的色彩の強い作品は、よかれあしかれ六朝人の視野から意識的に排斥される原因となつたであろう。司馬炎の逸話は、そうした時代思潮とは異なる原因からではあるが、政治的姿勢の豊かな文學のおちいりやすい、意圖的な排他意識の一端が如實に示されているように思われる。

三

西晉から東晉にかけては、摯虞の『文章志』・『文章流別論』と李充の『翰林論』とが、中國文學批評史上、特に著名である。それゆえ、それらの書によつて曹植評價の樣相を檢討すべきではあるが、ほとんど散佚してしまい、ただ次の『翰林論』逸文のみが、曹植の文學に關した資料として殘されている。

表宜以遠大爲本、不以華藻爲先、若曹子建之表、可謂成文矣、諸葛亮之表劉主、裴公之辭侍中、羊公之讓開府、可謂德音矣、

『文選』のなかには、曹植の「求自試表」「求通親親表」、諸葛亮の「出師表」、羊祜の「讓開府表」等の上表文を收めている。このことを右の逸文と關連させて考えるならば、先行の文學作品に對する李充の評價尺度は、沈思翰藻を以て貴んだとする黃侃の說[19]が改めて傾聽されることになろう。

しかも『晉書』卷92文苑傳序の、「三祖叶其高韻、七子分其麗則、翰林總其菁華、典論詳其藻絢」云々の語によれば、李充の撰した總集『翰林集』は、いわゆる三祖陳王七子の建安文學における精華をあつめたことが知られる。李充の總集の果たした歷史的な役割には、充分注意すべきであろう。文學の普及と影響の度合は、より多く總集に依存するからである。李充の評價は、まず「陳思之表、獨冠羣才」云々という『文心雕龍』章表篇の評價にうけつがれ、さらには『文選』の收錄へと影響をあたえたように思われる。その意味で、逸文にすぎない李充の評語も看過できないように思われる。

降つて、いわゆる玄言詩の流行した東晉の時代には、蘇彥[20]の「女貞頌序」に〝慷慨〟の語を使つた、

昔東阿王作楊柳頌、辭義慷慨、旨在其中、

の用例がみられる。この評語は注意すべきであろう。曹植を含めた建安文學の基調は、慷慨という語によつて端的に示される、と一般にいわれている。そうした見方の定着は、南齊末に著された『文心雕龍』（明詩篇・時序篇）以後のことであろうが、その評語の意味するところは、必ずしも單純では

ない。それは本來、いわゆる「壯士不得志於心」(21)なる激しい心の高ぶりを表現する言葉であつた「慷慨」(忼慨)という語が、建安文學の詩文實作の情念・思念の根源として改めて捉えられたということであろう。この言葉は、いわゆる三曹七子の中でも、曹植の最も愛好したことばであつた。清の丁晏編『曹集銓評』等には、合計九例ほど見え、詩歌の中だけでも、五回使用されている。特に曹植の「文章序」にいう「余少而好賦、其所尙也、雅好慷慨、所著繁多」という語は重要であろう。〝慷慨 kāngkǎi〟という語は、曹植の文學を捉える重要なことばとして、みなざるをえないわけである。その「慷慨」という語が、この段階、つまり東晉の蘇彥によつて、始めて曹植の作品の評語として使用されたのである。その意義は、はなはだ高いといわざるをえない。

また『晉書』巻79謝安傳には、次の逸話が記されている。

羊曇者、太山人也、知名士也、爲安所愛重、安薨後、輟樂彌年、行不由西州路、嘗因石頭大醉、扶路唱樂、不覺至州門、左右白曰、此西州門、曇悲感不已、以馬策扣扉、誦曹子建詩曰、生存華屋處、零落歸丘山、慟哭而去、

これは、三八五年の謝安の死後の逸話である。東山隱棲の志を遂げずに沒した謝安の死をいたむ羊曇が、ほかならぬ曹植の「箜篌引」の句を口ずさんだところに、かれの曹植詩への愛唱の度合が窺われて興味深い。

ただこの例などは、現存する當時の曹植關係の資料の總體からいえば、極めて孤立したケースにすぎない。玄風の廣く文壇をおおつた東晉時代には、文學的活動それ自體において、實作者たちの視線は老莊的な世界に限定されがちであつた。當時の平淡な詩風は、さまざまな起伏に富んだ曹植の詩風とは、ついにおのずから異なるものである。曹植、および曹植的詩風への關心も、またおのずから薄れていかざるをえなかつたのであろう。

〔注〕

(1) 「引長明灌街里」の逸文が傳わる。

(2) 『漢魏六朝唐宋散文選』(平凡社)の七七頁(伊藤正文氏の注)にみえる。

(3) 『漢書』巻70敍傳。

(4) 『三國志集解』巻19。

(5) 『梁書』伏挺傳には、「昔子建不欲妄讚陳琳、恐見嗤哂後代」の語がみえる。

(6) 魏志巻21の裴注所引『魏略』。

(7) 『文選』巻6「魏都賦」の李善注所引。

(8) 拙稿「曹操樂府詩論考」注1參照(目加田誠博士古稀記念

『中國文學論集』所收）

(9) 魏志卷5甄皇后傳には、「太和六年、明帝愛女淑薨、追封諡平原懿公主、爲之立廟、取后亡從孫黃與合葬」とある。

(10) 曹植の「金瓠哀辭」「行女哀辭」參照。

(11) 清の永瑢等撰『四庫全書簡明目錄』子部雜家類には、『類說』について、「摘錄古書二百六十一種、分前後二集、南宋之初、舊籍多存、慥又精於鑒別、凡所甄錄、大都遺文僻典、裨助多聞」と解說している。

(12) 嘉靖丙申（一五三六）季夏の王世貞撰「世說新語補序」によれば、『世說新語補』とは、劉義慶撰『世說新語』の十分の八と、明の何良俊撰『何氏語林』の十分の二とを選んで編纂した書であるという。

(13) 魏志卷13王朗傳の裴注參照。

(14) 魏志卷20の裴注所引『魏氏春秋』や『文選』卷52等に收める。

(15) 注14の『魏氏春秋』には、「冏、中常侍兄叔興之後、少帝族祖也、是時天子幼稚、冏冀以此論感悟曹爽、爽不能納」とある。

(16) 拙稿「曹植吁嗟篇考」（『中國古典研究』20號）參照。

(17) 『曹集銓評』に收める「魏陳思王年譜」の序。

(18) 研究發表の要旨として書いた拙稿「曹植の文學における慷慨と發憤について」（早大『古代研究』5號）參照。

(19) 黃侃撰『文心雕龍札記』序志篇第50の宏範翰林の條。

(20) 東晉の孝武帝（司馬曜）の頃の人。『全晉文』卷138蘇彥の條には、孝武の時、北中郎參軍となつたという。

(21) 「贈徐幹」詩の李善注に引く『說文』。

〔付記〕

この拙稿は、昭和五十年度の日本中國學會における口頭發表「曹植の評價をめぐつて―南朝期を中心として―」にほぼ接續するものである。